

特養施設における血液透析通院拒否に至る要因と対応

社会福祉法人照善会 こくら庵

○上村ひとみ 峰尚幸 桑内清美 小松利恵子 船越哲

【はじめに】

当施設は透析専門病院に附設した特養であり、入居者全員が透析患者である。今回、入所中に透析通院治療に対し拒否的となった 3 名の高齢患者において、その背景を分析した。

【症例 1】

87 歳女性、要介護 4、透析歴 2 年、認知症なし。本人の意識がない状態で透析導入となったが、その後透析中の血圧降下等の合併症が続き、透析通院拒否となった。

【症例 2】

77 歳女性、要介護 4、透析歴 1 年、認知症あり。透析導入の理解はできていない。透析開始時間の変更がきっかけとなり透析拒否となった。

【症例 3】

84 歳女性、要介護 4、透析歴 13 年、透析導入時は認知症なし。家族による虐待の為、施設へ措置入居となった。生活環境の変化にて認知症が進行し、強い通院拒否となった。

【考察】

認知症となった場合、一旦透析通院拒否となってしまうと、これを改善することは困難であり、現実的には「認知症患者を透析拒否にしない」方法となる。透析拒否の原因は、透析導入時の理解度だけでは説明できず、環境の変化が作用している可能性がある。よって、施設で可能な対応としては、生活環境のみならず、透析クールや曜日など、医療チームとの情報交換を密に取り、治療環境の変化を最小限にするよう提言することが重要と考える。